

非臨床家による「発達論としてのサリヴァンの対人関係論」の学習

How do non-clinician learn "Sullivan's interpersonal theory as developmental theory" ?

林 智 幸

本論文の目的

実証系心理学（一般心理学）と精神分析学（臨床系心理学）の間には大きな溝がある。この溝があまりにも大きいため、実証系心理学の側では、「実証性」と相性が悪い精神分析学との交流を最小限にしようとする立場がある。例えば、性格心理学の研究成果をまとめたハンドブックにおいてその傾向が確認できる。日本において、性格心理学のハンドブックは現在までに、1983年の『性格心理学ハンドブック』（長島、1983）、1998年の『性格心理学ハンドブック』（詫間、1998）、2013年の『パーソナリティ心理学ハンドブック』（日本パーソナリティ心理学会、2013）の3冊が発行されている。新しいものほど、精神分析学系の性格理論の記述が明らかに減ってきているのも、そのような立場を採用したためかもしれない。

しかし、もちろんこの溝を埋める研究も試みも多い。例えば、ボウルビィにはじまる愛着理論研究はその1つであろう（林、2013）。また、スターンによる乳幼児の自己発達の研究も、発達心理学者による実際の観察をもとに描いた「被観察乳児（observed infant）」と、精神分析学の発達理論から導かれた「臨床乳児（clinical infant）」と、それぞれ異なるアプローチの子ども像を統合させることを目的としたものと言えよう（丸田、1992）。

筆者は、人の心を理解するためには、実証的アプローチのみならず、臨床心理学などで重視されている現象学的アプローチも、どちらも大事であるという立場を採用する。しかし、現在、一般心理学（実証系）の「非臨床家」がフロイト以降の精神分析学を学ぼうとするとかなり苦労する。その理由の1つとして、フロイト以降の精神分析学を解説した資料の多くが、あくまでも臨床家向けの専門書であり、非臨床家が読むにはいささか難しいことが挙げられる。そこで、本論文では、「フロイトの精神分析学」の基礎知識を持つ「非臨床家」の学習者を対象として、精神分析学、特にサリヴァンの対人関係論の入門的知識を提供する。可能であれば、多少一面的ではあっても、サリヴァン理論の学習のスタート地点として使える「説明図」を提案できれば、なお良い。

非臨床家の「精神分析学」の知識：なぜサリヴァンに注目したか

そもそも一般心理学の範囲において精神分析学はどの程度の内容が説明されているだろうか。もちろん、詳細な説明をしている教科書もあるだろうが、非臨床家向けの教科書における一般的内容

はおおよそ次の通りだろう。精神分析学とは、ジークムント・フロイト (Sigmund Freud) によって提唱された精神障害の治療のための技法と理論であること、心が意識層と無意識層に分けられること、主に「リビドー (libido)」と呼ばれる性的欲動を中心に理論が構築されていること、リビドー説の観点から「口唇期／肛門期／エディプス期／潜伏期／性熟期」の5段階の性心理的発達段階を提唱したこと、人の心には「イド／自我／超自我」の3種類の心的装置があること、フロイトの一時的協力者としてアドラーやユングがいたこと、などが非臨床家の基本的知識となろう (詫摩・鈴木・瀧本・松井、2003)。

問題は、多くの非臨床家はフロイト以降の精神分析学の発展を知らない点にある。フロイト以降の精神分析学の流れを非常に大雑把にまとめると次のようになるだろう (Brown, 1961; 丸田、1992)。フロイトと袂を分けたアドラーとユングはそれぞれ「個人心理学」と「分析心理学」と自分の心理学の名前を変えて、自分の理論を更に発展させたこと、フロイトの影響を受けた学派として、「自我心理学」派、「対象関係論」学派、「対人関係論」学派があること、自我心理学は意識重視のフロイト理論の強い影響を受けていること、対象関係論は無意識重視のフロイト理論の強い影響を受けていること、そして、対人関係論の学者はフロイト理論を自分の理論の中に「組み込んだ」こと、全体的な流れとして、かつては自我心理学が優勢だったが、現在は対象関係論が優勢であること、自我心理学や対象関係論を融合させた「カーンバーグの対象関係論的自我心理学」や「コフートの自己心理学」などが生まれたこと、などがフロイト以降の精神分析学の基礎知識となるのではないか。この程度の概略でさえ、どれほどの非臨床家が知っているかもあやしい。

さて、本論文は、フロイト以降の1つの学派「対人関係論」、特にハリー・スタック・サリヴァン (Harry Stack Sullivan) の理論に注目する。Greenberg & Mitchell (1983) によると、現代精神分析学は「対象関係」を軸として「欲動」から「関係」へと変化した。「欲動」はフロイトが提案したものであるが、(フロイトもエディプス・コンプレックスなどにおいて「関係」要素に注目していたが)「関係」の源泉として対象関係論とともに対人関係論が挙げられる。つまり、現在主流となる「関係的」精神分析学を理解したいのであれば、サリヴァン理論も必修の学習内容となる。これがサリヴァンに注目した理由である。しかし、サリヴァンを解説した資料は数が少なく、また、その資料も非常に難解である (Chapman, 1978)。そのため、運良くサリヴァン理論のキーワード (人類同一種説、親友chumなど) を見ることはあっても、その全体像を把握することが、臨床家であってさえも難しいように思われる。いわんや非臨床家においておや、である。

サリヴァンの略歴

サリヴァンの略歴を示す (伊藤、1978)。1892年、ニューヨークのノーウィッチの近くの農家で生まれる。1917年、シカゴ医科大学から医学博士を授けられ、第1次世界大戦中、軍医として勤めた。1922年、ワシントンのエリザベス病院に勤めた後、1923年から1930年まで、メリーランド大学医学部や病院に関係していた。1933年から10年間、ニューヨークのウィリアム・アランソン・ホワ

イト精神医学研究所の所長を勤め、その間、1936年にはワシントン精神医学校を創設し、1938年には雑誌『精神医学』("Psychiatry")を創刊した。この雑誌はサリヴァンの対人関係論を提唱するにあたり役に立ったといわれている。1948年、アムステルダムの世界精神衛生大会からの帰途で、パリで死んだ。

彼は精神障害の中で「精神分裂病（統合失調症）」に最も関心を向けて、精力的な治療を行っていたことで有名である。なぜ、彼がこの症状を重視していたかという、彼自身が精神分裂病をたびたび発症していたこと（中野、2011）、また、精神分裂病が精神的健常人と断絶しておらず（人類同一種説）、彼の著作『分裂病は人間的関係である』の表題に示されているように、分裂病の観点から人を理解しようとしていたことが挙げられよう（妙木、1996）。

サリヴァンの性格観と「自己組織」

フロイトは心の内部に「イド／自我／超自我」の心的装置を仮定するなど、観察不可能だったり、検証が困難な概念であっても大胆に自分の理論の中に組み込んでいた。サリヴァンはこれに反対して、いわゆる「関与しながらの観察」と呼ばれる方法を取り、「対人関係」や「働き」など外部から観察可能なものに基づいて理論を構築している。

例えば、彼は、「精神医学の領域は、対人関係の領域である。一個の人格を、その人がその中で生き、そこに存在の根を持っているところの対人関係複合体から切り離すことは絶対にできない」、また、「人格は、対人関係の場で明らかにされ、それ以外の方法で明らかになることはない」と述べている（Greenberg & Mitchell, 1983）。彼の性格（人格）観は「対人関係の場」の強い影響性を仮定しており、自分が関わる対人関係と同じ数だけの性格があり、その対人関係の場に限定すれば固有パターンとしての性格を持つと考えた。よって、同じ人物が、優しい性格であったり、厳しい性格であったりなど一見矛盾するような性格像を描かれるとしても、対象となる人物（対人関係）の違いにより説明できることになる。

このように、従来、多くの人が内面的概念であると考えていた「性格」さえも、観察可能なものとして再定義されているように、同様に、精神分析学における最重要的な内面的概念の1つである「意識／無意識」についても再定義が行われた。サリヴァンは、フロイトのように意識や無意識を実在的に考えることに反対し、人が持つ「自己組織（self system）」の働きにより「意識／無意識」を説明しようとする。彼は、「顕微鏡」が焦点下のものを精密に拡大してみせる反面、鏡筒外部のものを注意の外に置くことをヒントにして、「自己組織」が注意する範囲の内部を「意識」、外部を「無意識」とした（鈴木、2004）。

さらに、この働きは「選択的非注意（selective inattention）」につながる。これは、必要かつ心地よい情報や印象にのみ注意を向け、不快なそれを除外する「自己組織」の機能の1つである。この機能が働くことで、不安を喚起する脅威的事態は「意識」の外へ「解離（dissociation）」されていく。また、このように選択的非注意や解離によって「自己（組織）」内部から追放されたも

のは「人格残余部」（または「睡眠」）に出没することになる。このように考えると、「人格残余部」がサリヴァン流の「無意識」と捉えることができよう。

サリヴァン理論における「人間の目的」と「欲求」

観察可能・実証可能性の観点からフロイト理論を再定義しようとする、無意識同様に、観察不可能な「欲求」をどのように考えることができるか。フロイトが精神分析学の研究前期においては「リビドー」の1種類を、後期においては「生の本能（エロス）」（リビドーと関連あり）と「死の本能（タナトス）」の2種類の欲求を仮定していたことは有名である。当然、サリヴァンはフロイト理論とは違う「欲求」説を提唱している。

人間を観察すると、何かの目的を持って行動をしていることがわかるが、この行動の目的が「満足追求の目的」と「安全追求の目的」の2種類に分類可能であると考えた。そして、この2種類の目的に対応した欲求として、「満足追求の欲求」と「安全追求の欲求」を想定した。このようにサリヴァンも「欲求」概念を使っているが、あくまでも観察可能な事実からの妥当な推論結果となるものとした。

この2種類の欲求は同じ対人関係論学派に属するカレン・ホーナイ（Karen Horney）も同様の意見を述べている。満足追求の欲求は、食欲、睡眠欲、性欲など生物的・身体的な要因であり、リビドーとの関連がある程度指摘できよう。逆に、フロイトは「独立的」に考えなかったが（リビドーと融合したものとフロイトは考える）、サリヴァンやホーナイはこの心理的・社会的な安全追求の欲求を前者よりも重視していた。例えば、ホーナイによると、人間は「基底不安（basic anxiety）」を持つが、親子関係における自分の安全を妨害するもの（親の直接・間接の支配、違和感、など）は全て基底不安を発生させ、また、不安な感情に対抗するためにいろいろな作戦をめぐらす（伊藤、1978）。例えば、敵意や復讐を考えたり、あるいは極端に服従的になって親の歓心を買おうとする。作戦が恒常的になると、知らず知らずのうちに性格を形成していくことになり、先の例で言えば、反抗的・敵対的な性格になったり、あるいは服従的・依存的な性格になったりする。また、「現代の基底不安の地盤に神経症が生じる」などのように、不安が過度に作用することで、神経症が生じるとも考えていた。

人間が、注意を向ける範囲を管理する「自己組織」を持つことは説明したが、この「自己組織」は「安全追求の目的」から誕生したことになる。人間は、無力なまま誕生するため、不安を回避して安全を獲得できるように、周囲の重要人物（母、父など）の協力が必要となる。そのためには、どのような作戦により協力を取り付けるが重要となるが、この「対人安全保障感（interpersonal security）の獲得作戦」を適切に管理・実行ができるような有効な装置として「自己組織」というシステムが発達していくことになると、サリヴァンは考えた（鈴木、2004）。

サリヴァンの認知的な体験様式

サリヴァン理論は「対人関係」の観点から「心」についてのいろいろな説明を試みるが、「対人関係」は、当然、他者とのコミュニケーションが重要となる。この対人コミュニケーションが適切に成立するためには、2者の間に、いろいろな共有された知識があり、容認される価値観や感情などが必要となる。例えば、近所にいる4本足の毛で覆われた動物を「犬」と呼ぶこと、他者と協力をすることが「良い」とみなされること、自分は価値ある存在で「愛されている」と感じるなど、他者との絶え間ない「合意による確認 (consensual validation)」によって少しずつ獲得されることになる。

このような他者との妥当な対人交流可能性の観点から、人の認知的な体験様式は3つのレベルに区別できるとサリヴァンは考えた。最も低いレベルである「プロトタクシスの体験 (prototaxic mode of experience)」は、純粋な形としては生後数週間しか存在せず、全くの非対人的状態である。サリヴァンは、統合失調症（精神分裂病）を根底に置いた心的モデルを想定しているが、統合失調症とはこのプロトタクシスの体験に回帰してしまう精神障害であると考えた。

続くレベルとしての「パラタクシスの体験 (parataxic mode of experience)」は、「歪律」という訳語が当てられることがあるように、「歪んだ認知」を意味する。この状態を説明するために、サリヴァンは作家カフカの文を例として挙げている（伊藤、1978）。「高い壁に囲まれた小屋の中にいる犬が、ある日、1つの骨が壁を越して投げ込まれたとき、おしっこをした。犬は考えた。『俺のおしっこがああ骨を生ぜしめたのだ』と。それからというもの、何か食べたいとき、犬は自分の足を上げたのである」この文から読み取れるように、パラタクシスの体験では、実際には正確な因果関係がないものに対して、「迷信」などのように、因果関係があるものと勘違いする認知傾向などを指し、「合意による確認」が取れていない状態とも言える。

最後のレベルである「シンタクシスの体験 (syntactic mode of experience)」は適応的で、合理的な妥当な象徴活動 (symbolic activity) からなるものである。「合意による確認」により蓄積された多くの象徴は万人が標準的な意味を持つものとして認めるもので、言葉や数が、その主なものである。この状態は、論理的で、情緒豊かな人間的なコミュニケーションを可能にする。

サリヴァンの発達段階

ここまでの話は、いわば、特に大人を理解するためのサリヴァン理論の知識とも考えることができる。しかし、本論文は発達論に注目しているので、そろそろサリヴァンが人がどのように発達すると考えていたかを見ていこう。

サリヴァンは発達段階を次のように設定している (Sullivan, 1953)。(1)幼児期 (infancy)：誕生から、対人的道具としての意味ある言語が発達するまでの時期。(2)小児期 (childhood)：意味ある言語の発達で始まり、他の子供たちと関わりたいという強い欲求を感じるようになった時点で

終わる時期。(3)児童期 (juvenile era) : 家族外の子供たちとの親密な交際への欲求を獲得することと始まり、性的成熟が個人の対人生活に強い影響を及ぼしはじめることによって終末を迎える時期 (前青春期preadolescenceは児童期の終末時期とみなす)。(4)青春期 (adolescence) : 性的成熟が対人生活に影響を及ぼし始める時点で始まり、成人の特徴と見なされている社会的、職業的、経済的諸活動を受け入れるようになるまで続く時期 (この時期はさらに青春前期early adolescenceと青春後期late adolescenceに分類できる)。(5)成人期 (adulthood) あるいは性熟期 (maturity) : 社会的、職業的、経済的諸活動を受け入れた時期であり、原則、死を迎えるまでこの時期は続く。

サリヴァンは自分の発達論における発達段階に独創的な名前をつけておらず、一般的な発達段階の名称を使っている (なお、infancyは幼児期、childhoodは幼児期と訳したほうが、日本語の一般的な発達段階の名前に近づく)。例えば、フロイトは「口唇期／肛門期／エディプス期／潜伏期／性熟期」、また、対象関係論のクラインは「妄想・分裂ポジション期／抑うつポジション期／(それ以降)」などのように、自分の発達段階を説明する場合に独特の名前を使っている。逆に言えば、独創的な名前が使われている場合、その名前が「どのような観点から発達を理解すれば良いか」の手がかりとなるが、サリヴァンの発達論は名前を手がかりとすることができない。

統合的傾向性によるサリヴァンの発達段階の特徴

そこで、サリヴァンの発達論の特徴を別の観点から考えてみよう。人間は1人で生きることができないが、他者とのつながりが苦しみを生むこともある。このように、(悪い) 対人関係は不安を生み出すこともあれば、(良い) 対人関係が不安を軽くもする。そしてサリヴァンは、人が「健康へ向かう傾向 (the tendency toward health)」を持ち、これに基づき良好な対人関係を求めるとして、その現れとして7種類の統合力を仮定した (Sullivan, 1953)。具体的には、「生との接触欲求」、「やさしさ (tenderness) 欲求」、「成人参加欲求」、「仲間欲求」、「受容欲求」、「親密欲求」、「情欲 (lust)」である。そして、Chapman & Chapman (1980) は、この7種類の欲求は、次のようにそれぞれの発達段階に設定することができるとした。

発達段階1 (サリヴァンの幼児期) の統合力は「生との接触欲求」と「やさしさ欲求」である。最初に、乳児の現在の生物的必要性を感知して、適切な庇護を与えてくれる人との交流を求める「生との接触欲求」が発揮されて、乳児の価値を認め、愛する人たちとの相互作用が行われる。続いて、「生との接触欲求」が拡張し、不安のない、愛情に満ちた対人関係を求める「やさしさ欲求」が発揮されて、養育者を含めて、他者との対人関係を築こうとするようになる。

発達段階2 (サリヴァンの小児期) の統合力は、幼児にとっての重要な大人に興味を持ってもらい、参加、容認を求める「成人参加欲求」である。この欲求が発揮されることにより、適切な対人関係を築くために必要な「言語」能力や「基本的生活習慣」などのさまざまな行為について、価値があり、正しいものであるとする「合意による確認」の経験を積むことができるようになる。

発達段階3 (サリヴァンの児童期) の統合力は「仲間欲求」と「受容欲求」と「親密欲求」であ

る。同年齢の家族以外の子どもたちとの活気に満ちた仲間集団を求める「仲間欲求」が発揮されて、活動の場が広がり、また協力や競争、妥協などの対人関係スキルが上昇していき、「合意による確認」も家族以外の仲間からも行われるようになる。これと同時に、自分にとって重要な集団からの承認を求める「受容欲求」が発揮されていき、仲間から追放されるという恐怖（陶片追放恐怖：the fear of ostracism）を感じるようになるが、この感情は個人をより広範な対人状況の中に統合させてゆくことの刺激となる。

発達段階3の最後の段階をサリヴァンは「前青春期」として独立させることがある。この時期は、相互親密性、友情、愛を求める「親密欲求」が発揮され、相手の幸福を自分の幸福と同等の価値を持つという親密性の感情を持てるようになり、対人関係が深まるようになる。この親密な関係は、健全な「合意による確認」が提供されることで、もし以前にパラタクシスの体験が蓄積されていても、シntaxシスの体験へと修正される可能性が高くなる。

発達段階4（サリヴァンの青春期）の統合力は「情欲」である。目前のあるいは遠い目的としての性器的性活動を求める「情欲」が発揮される。前青春期における「親密欲求」は主に同性を対象とするが、「情欲」は、異性への性欲に基づく興味関心を持つようになる。周知の通り、フロイト理論では「性欲」が重視されているが、サリヴァンは性的活動が優勢になるのは青春期以降であるとして、フロイトほど性欲を強調していないことになる。

発達段階5（サリヴァンの成人期）においては、新しい統合力が発揮されるのではなく、これまでの統合力を基礎として、より豊かな成長がなされる。サリヴァンは、この時期を「自分が自分以外のある個人と愛の関係を樹立できるようになる。愛の関係とは相手の個人が自分の『自己』と同様、少なくともほぼ同様重要となることである」と述べている（Sullivan, 1953）。

サリヴァン理論の図式的整理

これまでの結果を踏まえて、非臨床家がサリヴァン理論を学ぶ場合の見取り図を作成した（図1）。この図は、サリヴァン理論を「発達時期に応じた良好な対人関係は何か」という観点から整理している。

発達段階 (サリヴァンの呼称) (典型的な翻訳名)	段階1 (infancy) (幼児期)	段階2 (childhood) (小児期)	段階3 (Juvenile era) (児童期)	段階4 (Adolescence) (青春期)	段階5 (adulthood) (成人期)
統合力	生への 接触欲求	やさしさ 欲求	成人参加欲求	仲間欲求 受容欲求	親密欲求
重要人物	養育者（両親）	家族	同性集団	重要異性	
合意による確認		大人からの確認	仲間からの確認	重要異性からの深い確認	
体験 様 式	プロトタクシス	（誕生後数週間）			
	パラタクシス				
	シntaxシス				

図1 サリヴァンの発達理論の図式的説明（試案）

人間は、満足や安全の追求を目的としており、自分の「不安」を軽減するために、「自己組織」を形成させつつ、良好な対人関係を常に求めている。どのような理由で対人関係を構築・維持するかは発達時期によって異なり（統合力）、また、どのような対象を主とする対人関係であるかも異なる（重要人物）。対人関係成立の前提となる適切なコミュニケーション能力は、他者からの「合意による確認」により磨かれていくことになるが、「確認」相手が時期により異なる。また、認知的な「体験様式」も同様に「確認」により磨かれ、健全なものへと成長していく。

図1に基づき、サリヴァンの発達論は次のようにまとめられる。段階1（乳児期）は、非言語的コミュニケーションを駆使しながら、養育者との庇護的な対人関係を築きつつ、非対人的体験様式から未熟ながらも対人的体験様式に移行し、「対人関係」そのものが居心地が良いものであるという感情が育っていく。段階2（小児期）は、成人からの「合意による確認」により、言語的コミュニケーション能力を伸ばせるように、また、不安軽減機能としての「自己組織」の形成がはじまる。段階3（児童期）は、対人関係を自発的に築こうとする感情や能力が整い、対等な仲間集団関係と、承認される自己との関係が強化されていき、より親密な対人関係を求めるようになる。段階4（青春期）は、同性のみならば、異性にも興味を持つようになり、また集団だけではなく、特定の同性（親友）や異性（恋人）の親密な対人関係が形成していく。段階5（成人期）は、自分と同価値と認められる大事なパートナーを見定め、その後の長きにわたる対人関係を形成していく。

サリヴァン理論と他の精神分析学との関係性

最後に、サリヴァン理論と他の精神分析学との関連性を、鈴木（2004）を参考にしながら確認していく。サリヴァンが「対人関係論」学派あるいは「新フロイト派」に分類されることは既に述べたが、フロイトとの直接的な関係は薄いとされる。むしろ対人関係論学派全体としては、フロイトよりもアドラーの影響が強いとされ、例えば、『無意識の発見』の著者アンリ・エランベルジェが「彼ら（新フロイト派）は『フロイディアン（フロイト派）』というより『隠れアドリアン（アドラー派）』だった」と述べるほどである。

確かに「社会要因の重視」「意識／無意識の区別の廃止」を重視したアドラーの意見はサリヴァンとの類似点は高い。しかし、当然、両者にはいろいろ相違点もある。例えば、精神障害について、アドラーは、基本的に社会を良いものと捉え、それに適応できない（「社会からの逃避」）ことが問題であると考えた。対して、サリヴァンは、社会（対人関係）そのものが「不安」を生み出す原因にもなりうる考えた。

しかし、ここではフロイト系の精神分析学との類似点を確認してみよう。サリヴァンは、フロイトの数冊の著書（『性学説3説』『夢判断』『日常生活の精神病理』など）からフロイト理論に入ったとされる。後にフロイトを離れて、ある意味でフロイト理論を独自に利用した形になるが、フロイトの対立者であるとは考えていなかったようである（辻河、2010）。しかしサリヴァンにとっては、フロイトよりも、対象関係論の形成に大きく影響を与えたフェレンツィ・シャーンドル

(Ferenczi Sandor) からの精神分析学の影響性が強く、「自分の信用しているヨーロッパ唯一の分析家だ」と友人に語るほどだった。

また、メラニー・クライン (Melanie Klein) に先駆けて、「対象関係論を先取りしていたサリヴァン」(鈴木、2004) も指摘できる。本論文では省略したが、サリヴァンはクライン同様に、心的世界に、「良い母親 (good mother) / 悪い母親 (bad mother)」という部分対象が存在すると考えている。この2つの対象を起点として、世界や対人関係が「情緒的に快適なもの (良いもの)」と「不安を生み出すもの (悪いもの)」によって判断されることを学び、基本的に「良いもの」が相対的に多いという感覚を持つことが健全な発達にとって重要であると考えていた。

このようにサリヴァン理論は多くの理論との類似点が指摘できる。現在、「関係」的精神分析学が優勢であり、その源流が対人関係論と対象関係論であると述べたが、サリヴァンの思想が「フェレンツィ的」「クライン的」であることから、既にサリヴァン理論 (対人関係論) が対象関係論的であるとも考えられる。ならば、フロイトが (欲動的な) 精神分析学を生み出し、サリヴァンが「関係」方向に変更させた (少なくとも強力な影響因である) とも言えるだろう。

引用文献

- Brown J.A.C. 1961 *Freud and the post-Freudians*. Penguin Books: Middlesex. (宇津木保・大羽 稔 1963 フロイトの系譜—精神分析学の発展と問題点、誠信書房)
- Chapman, A.H. 1978 *The treatment techniques of Harry Stack Sullivan*. Brunner/Mazel. (作田 勉監訳 1995 サリヴァン治療技法入門、星和書店)
- Chapman A.H. & Chapman M.C.M.S. 1980 *Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness*. Brunner/Mazel. (山中康祐監訳 1995 サリヴァン入門—その人格発達理論と疾病論、岩崎学術出版社)
- Greenberg J. & Mitchell. S.A. 1983 *Object relation in psychoanalytic theory*. Harvard University Press: Cambridge. (横井公一 2001 精神分析理論の展開—欲動から関係へ ミネルヴァ書房)
- 林 智幸 2013 成人愛着スタイルとBigFive性格特性との関係性、静岡英和学院大学静岡英和学院大学短期大学部紀要、11、133-141.
- 伊藤隆二 1978 第4章 新フロイト学派の人々 詫間武俊 (編) 性格の理論 [第2版] 誠信書房、59-79.
- 丸田俊彦 1992 コ福特理論とその周辺 自己心理学をめぐって 岩崎学術出版社.
- 長島貞夫 (監) 1983 性格心理学ハンドブック 金子書房.
- 中野明德 2011 サリヴァンの生涯と対人関係論、福島大学総合教育研究センター紀要、11、27-36.
- 日本パーソナリティ心理学会 (監) 2013 パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版.
- 妙木浩之 1996 サリバン 福島章 (編) 精神分析の知88 新書館、72-73.
- Sullivan, H.S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. (中井久夫・宮崎隆吉・高木 敬三・鎌幹八郎訳 1990 精神医学は対人関係論である、みすず書房)
- 鈴木瑞実 2004 サリヴァンの対人関係論 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典【改訂版】 培風館、140-144.
- 詫摩武俊 (監) 1998 性格心理学ハンドブック 福村出版.
- 詫摩武俊・鈴木乙史・瀧本孝雄・松井 豊 2003 性格心理学への招待—自分を知り他者を理解するために【改訂版】 サイエンス社.
- 辻河昌登 2010 ウィリアム・アラソン・ホワイト研究所の精神分析家たち 妙木浩之 (編) 自我心理学の展開—フロイト以後、米国の精神分析— ギョウせい、97-110.

